

第三章 遺 跡

1 遺跡の概観

地 形 調査区は東に接して流れる菰川とともに北から南へ向う浅い谷筋に位置する。検出遺構面は
標高 59.6~59.2 m と南へ低くなるが、ほとんど平坦地で旧流路・園池の部分で谷筋を形成す
京 造 営 前 る。奈良時代以前に調査区北東から南へ流れる旧河川 SD1560 がある。同様の旧河川が北から *
の 遺 構 また西から SD1560 に流れ込む形に検出されているが、それ以外は黄褐色粘土またはそれより
下層の青灰色粘土が地山となる。旧河川の堆積層の砂礫層から5世紀中頃の布留式土師器が出

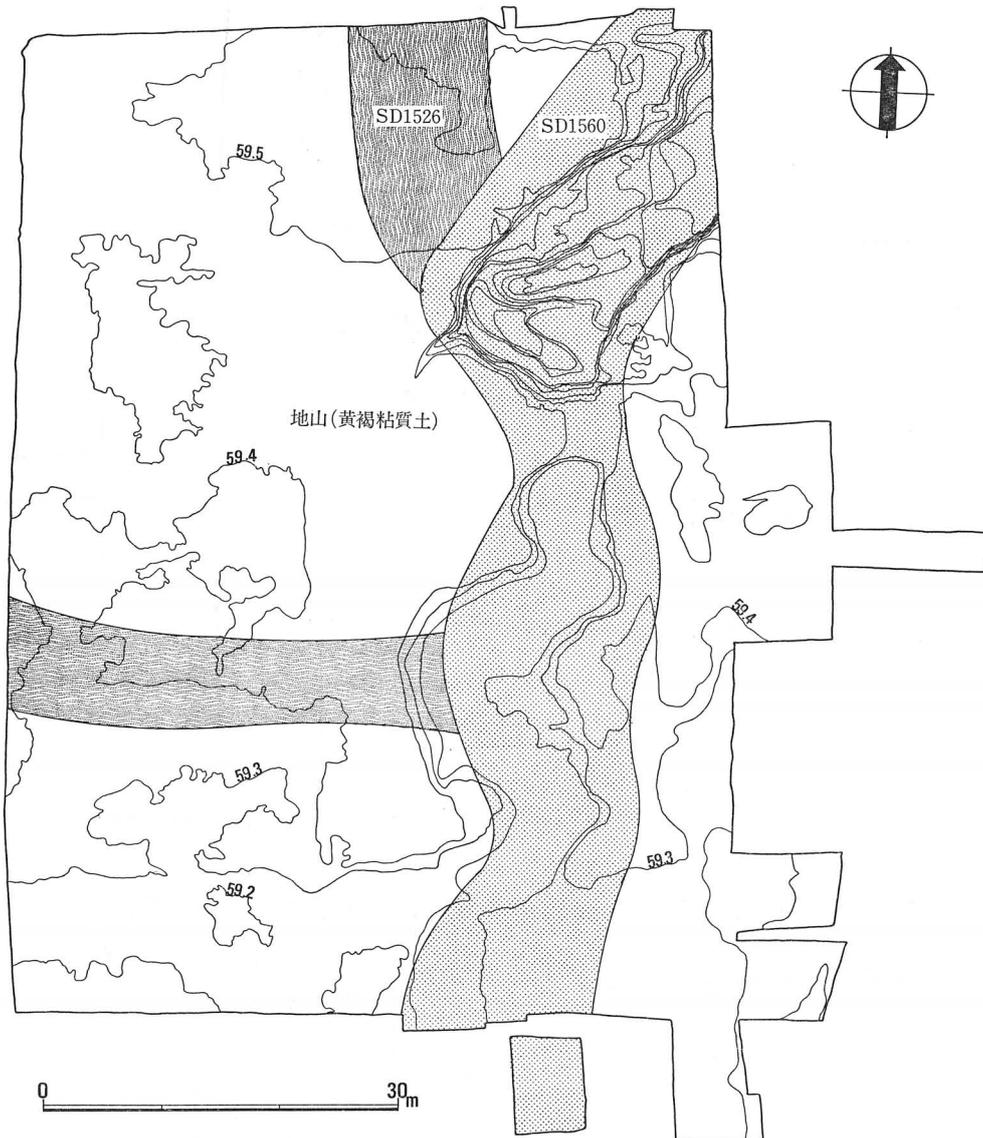


Fig. 13 調査区の地山・地形

土している。旧河川 SD1560 は、平城京造営前に自然堆積により廃絶するが、旧河川の流路をそのまま利用した流路 SD1525 が旧河川の堆積を切って造成される。流路 SD1525 の堆積は 3～4 層みられ、最下層が黒灰色粘土、その上に暗灰色粘土と砂が互層に堆積し、最上層は暗灰色含砂粘土の堆積がみられる。最下層からは和銅の木簡の他、多数の木屑とともに奈良時代前半の土器が、最上層からは平城Ⅲ期の土器が出土し、流路が奈良時代当初に旧河川路を利用して開削され、自然堆積で天平年間に埋まる状況を示している。なお流路は、旧河川の崖面・氾濫原が埋め立てられずにそのままの形で使われていたため、流路廃絶後も浅い流れとして存続し、黒褐色粘土の薄い堆積がみられる。旧河川路の凹み、流路は北側の七坪においてもみられ、六坪・七坪二町の占地を想定させるものである。またこの流路は廃絶後凹みが茶褐色粘質土により一気に埋め立てられ整地が行われる。石組の園池 SG1504 の造成はこの時期で、流路の埋め立てに際して六坪の中心に園池を造作することを意図し、流路の形状を利用した形で流路埋土(暗灰色粘土)の凹みの上に池の底石を並べ、岸边は茶褐色粘土で整地・整形して石敷・景石の据えつけを行う。また導水の木樋も同様茶褐色粘土の整地と併行して行われている。黒褐色粘土層より平城Ⅲ期の土器や軒丸瓦6271型式が出土している。また茶褐色粘土の整地層よりⅢ期の軒瓦6282・6721型式やⅢ期の土器が出土しているため、石組の池の造成は遷都後天平宝字年間に比定される。また池内の遺物の状況より平安時代初頭まで園池が存続していたことが判明した。流路・園池周辺の整地層は茶褐色粘土の他に、流路の外側で旧河川沿いに河川堆積土の暗褐色砂質土がみられ、茶褐色粘質土の整地は、SB1574・SB1985 などにも部分的にもみられる。整地土、柱通り、柱穴の重複や、柱掘形、抜取り穴から出土の遺物より、六坪の遺構は奈良時代で大きく B～E の四時期に分けられる。B 期すなわち奈良時代前半の流路 SD1525 と併存する遺構としては、建物では SB1505 と官衙的配置をとる SB1570・SB1571・SB1573・SB1542 の 5 棟と、六坪北側築地の南雨落溝 SD1545 と井戸 SE1610 と、平行して流れる SD1453 と SD1451 の他、SD1525 に流れ込む数本の水路がある。C 期の遺構は園池造成当初の時期で、前期の建物の内 SB1505 以外は踏襲され、他に流路 SD1525 の埋め立てと合わせて六坪の中心に造成される園池 SG1504 とそれを画する北塀 (SA1500)、東塀 (SA1455)、西塀 (SA1536) と西側の建物 (SB1510)、北側の建物 (SB1550)、井戸 SE1547 がある。D 期の遺構は大幅に改修される時期で、池の西側に礎石建物 (SB1540) が建てられ、合わせて北塀も建物に取りつく形で延長され、池沿いの建物 (SB1470) と南塀 (SA1473) が建つ。北側は建物 SB1574・SB1552 がいずれも 7 尺を基準尺とする位置に 10 尺の柱間で造営される。E 期の遺構は奈良時代末から平安時代初頭にかけての遺構で、池の西側に小さな建物 2 棟 (SB1471, SB1472) の他、東側には SB1476 とそれを隠す塀 SA1483 が建てられ、北側では SB1985 の建物がある。

奈良時代
前期の遺構

園池の造成

時期区分

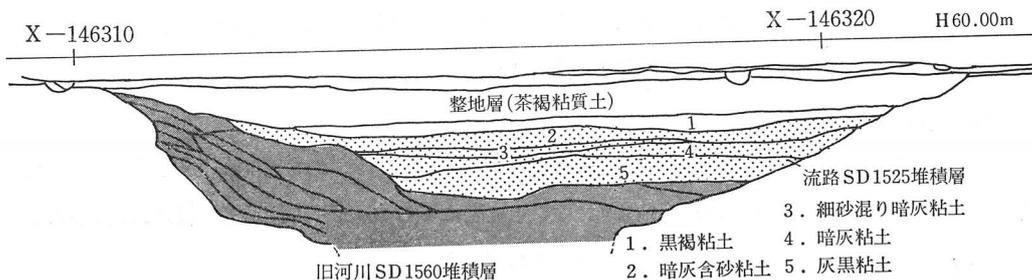


Fig. 14 旧河川 SD1560・流路 SD1525 堆積土層図

2 遺 構

A A 期（奈良時代以前）の遺構

SD1560 (PLAN 4; PL. 8)

奈良時代以前の菰川の旧河川。奈良時代に入っても 50cm ほどの水深で存続する。SD1525 はこの SD1560 の堆積の中央部を穿って幅狭く造成されるが、SD1560 の両岸は深さ 50cm の状態 *
で存続している。この堆積土上層から平城宮 I～II 期の土器が出土しており、SD1525 と同 *
時期に存在していたことを示す。北の七坪の調査でも上流部が検出されている。六坪と同様流 *
路 SD1525 の前身の旧河川として存続していたことが確認されている。園池北方で SD1560 *
の幅は 10～12 m、深さは主遺構検出面から 50～70 cm である。流路 SD1525 の下層の SD *
1560 の堆積土砂礫層からは弥生・古墳時代の土器が出土している。この流路の下層には、さ *
らに古い時期のものと思われる流路 SD1526 などが数条検出されている。

SD1457 (PLAN 6)

道路状遺構 SF1559 の北側溝 SD1453 の西端、南の東西溝。東端は SD1456 と重複してそ *
れより古く、西端は削平を受けて消滅する。幅 30～40 cm、深さ 10～15 cm、検出長さ約 8 m *
である。奈良時代以前の遺構で、遺物は出土しない。埋土に拳大の礫を含む。

SD1520 (PLAN 4)

園池北の東西堀 SA1500 の東端北で検出された斜行溝。奈良時代以前の遺構で旧河川 SD *
1560 に流入する自然流路と考えられる。

SD1532 (PLAN 2)

園池北西の斜行溝。南西は SK1534 の北西に端を発し北東に向って流れ、流路 SD1525 に *
よって切られる所まで約 18.5 m にわたって検出した。幅は 0.8～1.5 m、深さは 10～20 cm *
で、中央部は深く 40 cm に達する。途中で重複する SA1500、あるいはその南北の東西溝の *
いずれよりも古く、奈良時代以前の自然流路と考えられる。したがって SD1525 以前の旧河川 *
SD1560 に流れこんでいたものであろう。出土遺物は少ない。

SD1546 (PLAN 4)

井戸 SE1547 の東、流路 SD1525 との間にある東西溝。SE1547・SD1525 のいずれよりも *
古い。幅は約 60 cm、深さは約 10 cm である。

SD1561 (PLAN 4)

発掘区北部中央から南流する流路で、SD1560 と重複してそれより古い。最上層の堆積層 *
(砂層) を切って SB1550・SB1552 を造成している。

SD1562 (PLAN 2)

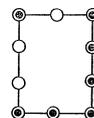
発掘区の北端西部で検出した斜行溝。検出長さ約 18 m、幅は 1 m 前後、深さ約 15 cm *
である。発掘区北端では SD1545 と重複し、また東西に延びて SB1552 と重複してこれらより *
も古く、SB1552 の南で土壙状の溜まりを形成して終わる。

B B期（奈良時代前半）の遺構

SB1505 (PLAN 4; PL. 4)

園池の北西に接する位置にある桁行3間(6.3m, 7尺等間), 梁間2間(4.9m, 8尺等間)南北棟掘立柱建物。東南隅の柱掘形は, 園池周囲のバラス面の下から検出されており,

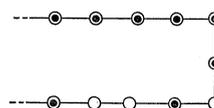
- * 園池造営以前の遺構と知られる。方位は北で方眼より東にやや振れる。柱掘形は一边90cm前後の略方形を呈し, 柱痕跡は径約25cmである。



SB1542 (PLAN 2; PL. 4)

SB1540の北半と大きく重複する東西棟掘立柱建物。桁行4間(4間分10.6m, 9尺等間)以上, 梁間2間(5.4m, 9尺等間)で西部は発掘区

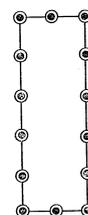
- * の外になる。方位は北で方眼よりやや東に振れる。すでに述べたようにSB1540より古く, またSB1505の北妻柱筋と北側柱をそろえている。



SB1573 (PLAN 2; PL. 4)

東西塀SA1500の西端北で検出した桁行5間(12.6m, 8.5尺等間), 梁間2間(4.2m, 7尺等間)の南北棟掘立柱建物。重複する遺構がなく伴出遺物もほとんどないの

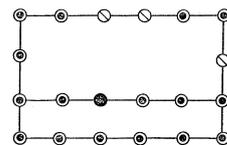
- * で時期の比定が困難であるが, SB1570の東妻柱筋と本建物の西柱筋がほぼ一致することから, SB1570・SB1571と一連に鍵の手の配置を構成する建物と考えられる。



SB1570 (PLAN 2; PL. 5)

発掘区の北西で検出した桁行5間(13.3m, 9尺等間), 梁間2間(5.4m, 9尺等間), 南片庇付(庇の出2.7m, 9尺)の東西棟掘立柱建物。方位は北でわずかに西に

- * 振れる。身舎の柱掘形は一边1.2m前後の略方形を呈し, 柱痕跡を留めるものが多い。南入側柱筋西から3の掘形には径32cmの柱根が遺存する。庇の掘形は身舎よりひとまわり小さく, 柱痕跡は径25cm前後である。南入側柱筋西から2の掘形には柱根の残欠と, 礎盤が遺存する。



SB1571 (PLAN 2)

- * 発掘区の北西隅で検出した南北3間(5.4m, 9尺等間)の柱穴で, その位置からSB1570と同規模の東西棟建物の東妻部分と推定される。すなわち約6m(20尺)の距離をおいて2棟が正しく横に並ぶ配置となり, その規模から推しても2棟ともこの区域では主要な建物に当るものと考えられる。



SD1451 (PLAN 5)

- * 園池東南で検出された東西溝。東は発掘区以東に延び, 西は園池の排水溝SD1466の下層となつて未検出である。検出長さ約31m, 幅50cm前後, 深さ約20cmである。SD1453と平行しており, この間を路面とする道路SF1559の南側溝に比定される。埋土から平城宮Ⅰ～Ⅱ期の比較的早い時期の土器が出土しており, 年代は園池造営以前に位置付けられる。埋土は赤褐色粘土で園池造営時の整地土と等しく, 園池造営に伴って埋め立てられ廃絶したものと推定される。流路(SD1525)に流れこんでいたものであろう。

1) 模式図の記号 ●柱根をとどめる掘形 ●柱痕跡をとどめる掘形 ○抜取痕跡あり ○掘立柱掘形
……推定(すべて方位は上が北, 縮尺約600分の1)

SD1453 (PLAN 5)

園池東南の東西溝。SD1451 の北 6~7 m を隔てて SD1451 と平行し、間に路面を形成する。道路 SF1559 北側溝に比定される。東部で一旦とぎれるが東は発掘区以外に延び、西は園池南端の石組 SX1526 の背後に広がるように終わる。SD1451 と同様に、園池以前の流路 SD1525 に流れこんでいたものと推定される。約 23 m にわたって検出。幅 40~50 cm、深さ 10~20 cm である。遺物の出土は少ない。 *

SD1456 (PLAN 6)

園池の南で検出された斜行溝。SD1453・SD1451、すなわち道路 SF1559 より古く、SD1457 より新しい。流路 SD1525 造営以前、奈良時代以前にもさかのぼり得る遺構である。幅は 60~70 cm、深さは約 20 cm であり、埋土には遺物を含まない。SD1453・SD1451 の間約 12 m にわたって検出され、SD1451 以南は浅い痕跡となって残る。 *

SD1459 (PLAN 5)

SD1451 西端南の南北溝。北端は SD1456 が SD1451 と重複する地点からはじまり、南は発掘区の外に延びる。幅約 40 cm、深さ約 15 cm、検出長さ約 2.5 m である。SD1451 より古い。 *

SD1478 (PLAN 5)

発掘区東端、SB1476 の南側柱筋に重複する東西溝。SB1476・SD1477 より古い。幅約 20 cm、深さ 5 cm、検出長さ約 3 m である。遺物の出土は少ない。 *

SD1480 (PLAN 5)

SB1476 の北側柱筋に重複する東西溝。SB1476 より古く、園池造成以前の流路 SD1525 に伴なう一連の東西溝のうちの一つと考えられる。東端は明瞭でないが、SK1474 以西から SA1483 付近まで約 17.5 m にわたって検出した。幅は 20~30 cm、深さは 2~3 cm である。埋土には遺物を含まない。 *

SD1489 (PLAN 5)

発掘区東方 SA1500・SA1455 の合する点の南で、SA1483 と重複する東西溝。幅約 30 cm、深さ 5~10 cm、検出長さは約 10 m にわたり、西端は園池の東約 4 m の所で削平を受けて消失する。また、出土遺物も少なく、時期は詳らかでないが、流路 SD1525 に伴なう一連の溝の一つと推定されよう。 *

SD1488 (PLAN 5)

発掘区東端、SA1500 を東へ延長した位置にある東西溝。東端は発掘区の外へ延び、西半で一旦途切れ、西端は SA1500・SA1483 の交点の柱掘形と重複して終わる。幅約 25 cm、深さ 5 cm、検出長さ約 8.5 m である。SA1500・SA1483 より古い。 *

SD1499 (PLAN 5)

園池周囲を区画する堀 SA1500・SA1455 の東北隅外側で検出したやや斜行する東西溝。東は発掘区の外に延び、長さは約 9 m である。西端は消失するが、幅は約 25 cm、深さ約 5 cm である。 *

SD1501 (PLAN 5)

SD1499 の北で検出された東西溝。東は発掘区の外へ延び、長さは発掘区東端から西へ約 8.5 m である。西端で一旦途切れるが、下流は SD1521 に続く可能性が大きい。前項 SD1499 と *

共に園池前身の自然流路 SD1525 に流入する一連の溝の一つと推定される。幅は 30~50 cm、深さは 5~15 cm である。

SD1508 (PLAN 4)

SB1505 の北妻柱筋に重複する東西溝。東端は池汀の西約 4 m の位置から始まり、以西 12.7 m にわたって検出した。幅は 20~30 cm、深さ 5~10 cm である。SB1505 の西北隅柱掘形と重複し、それより古い。東流する溝でやはり流路 SD1525 にともなうものと推定される。遺物の出土をみない。

SD1521 (PLAN 5)

SA1500 の北で検出された東西溝。SD1501 (あるいは SD1499) の下流と推定され、流路 SD1525 に流れ込む。

SD1525 (PLAN 4; PL.8)

発掘区東半を南北に蛇行しながら貫流する流路で、旧河川 SD1560 の堆積を切って造成され、奈良時代前半に存続していたものである。旧河川 SD1560 が深さ 50 cm ほどになった時点でその中央部を掘り直したもので、旧河川の肩はそのまま生きた状態で存続している。廃絶時には、茶褐色粘質土で旧河川の肩まで一気に整地される。北側の七坪の調査でもこの流路の上流部を検出しており、やはり旧河床を切って造成され、幅・深さと同規模で整地土も同様の茶褐色粘質土で行われるという同様の知見を得ている。埋土下層に含まれる土器は主として平城宮 I 期・上層は III 期に編年されるものであり、後者は流路廃絶、すなわち園池造営の時期の上限を示すものである。幅は 2~4 m、深さは流路自体では 1 m、旧河川の肩からは 1.5 m をはかる。なお、堆積土下層から、木簡が 102 点出土した。詳しくは木簡の項に述べるが、このうち年紀を持つものが 4 点あり、和銅 3 年が 1 点、同 5 年が 1 点、同 7 年が 2 点である。

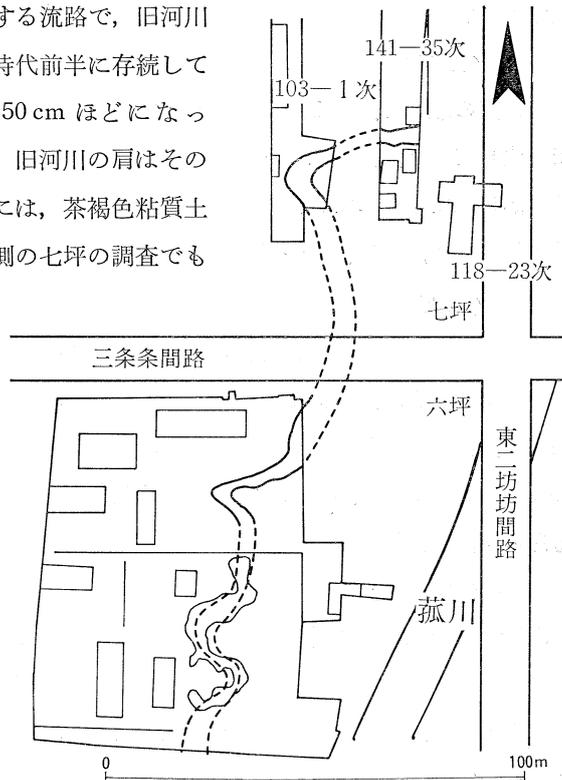


Fig. 15 流路 SD1525 平面図

このうち年紀を持つものが 4 点あり、和銅 3 年が 1 点、同 5 年が 1 点、同 7 年が 2 点である。

SD1528 (PLAN 4)

発掘区中央を横断する東西堀 SA1500 の南沿いに検出された東西溝。東端は園池周囲のバラス敷の下となり未検出。西端は斜行溝 SD1532 に達するが、それより新しい。園池造営以前の流路 SD1525 に流入する東西溝のひとつである。約 14 m の長さによって検出。幅は 30~70 cm、深さは約 10 cm 前後で、遺物はほとんど出土していない。

SD1529 (PLAN 4)

SA1500 北方の東西溝。東で幾分南に斜行しており、9 m の長さを検出。幅約 30 cm、深さ 5 cm 前後。東流の溝で、流路 SD1525 に流れ込む。西端で斜行溝 SD1532 と重複するがそれ

より新しい。

SD1530 (PLAN 4)

SD1529 北の東西溝。西部で SD1532 と重複し、それより新しい。検出長さ約 9 m、幅約 30 cm、深さ約 7 cm である。東流する溝で、遺物の出土は少ない。

SD1533 (PLAN 4)

SB1573 東の東西溝。検出長さ 9.5 m、幅は 30~60 cm、深さは 10~15 cm である。途中で SD1532 と重複しこれより新しく、東端は流路 SD1525 に流入する。埋土より耳付の須恵器が出土した。

SD1544 (PLAN 4)

発掘区東北隅、SB1985 の北側柱に重複する東西溝。流路 SD1525 に東流する。SB1985 の柱掘形と重複し、それより古い。検出長さ約 5 m、幅約 40 cm、深さ 5~20 cm で、遺物の出土は少ない。

SD1545 (PLAN 2.4)

発掘区の北端で、その東西にわたって約 50 m の長さを検出した東西溝。幅は 60 cm 前後で一定しており、深さは 15~25 cm、溝底は発掘区内ではほぼ水平であるが、流路 SD1525 の位置からみて東流していたものと推定される。六坪の北を画する築地の内側すなわち南の雨落溝に比定され、平城宮 II~IV 期の長期にわたる土器片が多量に出土した。

SF1559 (PLAN 6)

SD1451・SD1453にはさまれた幅 6 m 前後の東西道路敷。発掘区の東南部で長さ約 30 m にわたって検出され、方位は西でやや南に振れる。時期は側溝と見なされる前記両溝の出土遺物から、奈良時代前半に位置付けられ、園池造営以前に廃絶する。道路心は坪南北心から南に 18.9 m の所に位置する。坪の南北を三等分する地点よりは幾分北にずれ、上記の方位の振れもあって、坪内地割の道路となり得るかは確定し難い。

SK1578 (PLAN 2)

SB1570・SB1571 の中間北に検出された不整形の大土壙。最大幅は南北約 3.5 m 程、東西約 5 m であるが、西部は発掘区の外に延びる。埋土から平城宮 I 期の軒平瓦片 6641 型式 C 種、同 II 期の軒平瓦片 6671 型式 K 種が出土しており、比較的古い時期の土壙と推定される。

SD1580 (PLAN 2)

発掘区北西隅で検出した南北溝。SB1570 の西から 2 列目の三つの柱掘形と重複する位置にあり、これより古いことを知る。遺物の出土は少なく、年代・性格共に不明であるが、発掘区内では南北溝が珍しく、またその方位もほぼ正しく国土方眼方位に乗り、条坊方位にも近いことから、何らかの地割の溝となる可能性もある。

SX1982 (PLAN 4; PL. 8)

流路 SD1525 の溝底に打ち込まれた 2 本の杭。屈曲点の東約 4 m の地点に、約 65 cm の間隔を置いてほぼ南北に打たれている。杭の太さは 12 cm、残存長さ 70 cm である。流路埋立てに関わる堰のためのものかとも考えられるが、板の類が残存せず、性格はなお不明である。

SK1983 (PLAN 4)

旧河道 SD1560 中で検出された土壙。長さ径約 2 m の不整形で、深さは約 30 cm である。

埋土中から「侍従」と墨書のある土器片が出土している。

SE1610 (PLAN 2)

- SE1547 の北西近くで検出された板組みの井戸。掘形平面は径約 1.5 m の不整形円形を呈し、深さは 0.6 m、底面近くに方形を形成する側板の痕跡が見られる。遺物が少なく、年代の判定
- * が困難であるが、SB1570・SB1573 に近接しており、それに伴う可能性が考えられる。その場合は園池 SG1504 ないし SE1547 に先行することとなる。

C C期（奈良時代中頃）の遺構

SA1500 (PLAN 2.4; PL.5)

- 園池の北に接して、発掘区の中央部を東西に画する塀。東は SA1483 の北端から西は SB
- * 1540 の東北隅にとりつく部分まで、途中園池北端の石組部分をはさんで 45.4 m の長さにあたる。全体は①池東側 4 間 (8.3 m, 7 尺等間)、②池西側東から 9 間まで (18.7 m, 7 尺等間)、③ SB1540 との接続部分 4 間 (10.2 m, 8.5 尺等間) の三つの部分からなる。①・②と③は柱間寸法が大きく異なり、基準尺度も異なる（後者が大）とみられることから、まず①・②の部分があり、後に SB1540 造営に伴って③を造りその間の空隙を閉じたと推定される。また、①・②の部分の間隙は 8.3 m あり、7 尺等間で 4 間に割りつけ得ることから、①・②部分が一連のものと考えられる。②の東端の柱掘形は池石敷と重複し池石敷より新しい。いずれにせよ、園池に直接関連し、また SA1455・SB1540 と関連する点で遺構配置及びその時期区分を解く鍵となる重要な遺構と言えよう。①・②部分の柱掘形は南北を長辺に約 1.2 m、短辺 0.8 m を基準とする長方形を呈し、径 30 cm 前後の柱痕跡を留めるものが多い。また、③部分のいずれかの柱間を門としていたことも考えられよう。

SA1536 (PLAN 3)

- SA1500 と SB1510 の間で検出した南北塀。7 個の掘形が同一柱筋上に乗るが、南 2 個は浅く、しかも柱間寸法が乱れることから土塀とみなし、北 5 個の柱掘形による 4 間分を塀と認めた。4 間分の総長 9.5 m、柱間は 8 尺等間である。上記のいまひとつの根拠は、この柱筋が
- * SA1500 の柱位置に乗らず、また SB1510 の東側柱筋とも微妙に喰い違っていて、両者と一連の施設とは必ずしもなり得ないと考えられるからである。SA1500 との間隔は約 2.2 m と塀の柱間より狭く、また最南の掘形をとると、それと SB1510 との間隔は逆に約 4 m とひろくなって秩序が認められない点も否定的な要素である。この塀の位置は、坪の東西 2 等分線から西へ 70 尺 (SA1455・SA1483 と対称) の所にあり、東西 3 等分線上にあたる。この点で地割の塀ともなり得る性格を持つが、池周囲を正方形にせまく囲うこと自体が不自然であるし、一方池と正対すると推定している建物 SB1540 の前面をことさら閉ざすことも疑問であるので、SB1542 に関連する塀と考えておきたい。

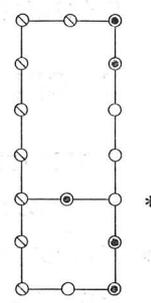
SA1455 (PLAN 4.5)

- 発掘区東端で検出した南北塀。園池を含んだ区画の東面部分となる。北は北面の塀 SA1500
- * の東端にとりつくように（直角に南に折れて）はじまり、南は東西溝 SD1453 を越した所で終る。全長は 37.6 m で中間部分は発掘区の外になり、北半は 7 間分で 15.4 m ある。最北端の SA1500 にとりつく部分の柱間のみは 2.7 m (9 尺) と広く、他は 7 尺を基本としていると考

えられるが、多少の出入があって施工精度は北面の塀 SA1500 より低い。全体の柱間を 7 尺等間とすると、総柱間数は 18 と推定されるが、南半はこの前提では 1 間の寸法が 7 尺に不足する。また、北半検出部分では他の南北塀 SA1483 と重複するが、それより古い柱掘形は長辺 1.0 m 前後、短辺 0.8 m 前後の東西に長い長方形を基本とし、径 20~30 cm の柱痕跡、あるいは柱抜取穴を留めるものがある。

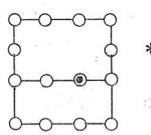
SB1510 (PLAN 3; PL.5)

園池の西方で検出した桁行 6 間 (17.7 m, 10尺等間)、梁間 2 間 (5.9 m, 10尺等間) の南北棟掘立柱建物。方位は北でわずかに西に振れる。南から 2 間目の柱筋の棟通りに間仕切と思われる柱穴がある。比較的大規模な建物で、園池に正対しているの



SB1550 (PLAN 4; PL.6)

発掘区北方、旧河道 SD1560 北西で検出した桁行 3 間 (6.3 m, 7尺等間)、梁間 2 間 (4.8 m, 8尺等間)、南片庇付 (庇の出 2.7 m, 9尺) の掘立柱建物。SB1552 と重複する。柱穴の重複はないが、身舎東南隅の柱掘形から 6667 形式 (平城宮Ⅲ期) の軒平瓦が出土しており、より古く位置付け得る。身舎柱掘形は径 50 cm ほどの不整形で、庇の柱掘形はこれよりひとまわり小さい。



SE1547 (PLAN4; PL.8)

発掘区北部、流路の屈曲点の西で検出された素掘りの井戸。遺構面では南北 4.5 m、東西 3.5 m の長円形に広がるが、底部の平面は略円形で、径は約 2 m である。埋土は大きく 7 層に分かれ、上 4 層は周壁がくずれて土壇状となった後の堆積と考えられる。埋土最下層からは、平城宮第Ⅲ期の軒平瓦 6721 型 C 種を含む瓦片・土器片が出土し、最上層からは第Ⅱ期の軒平瓦 6664 型式 F 種を含む瓦片、奈良時代から平安時代初頭の土器片が出土し、周囲に落ち込んだ状態で数点の埴が出土した。また、井戸の南側には、縁に接して東西 3.5 m、南北 0.8 m の範囲にバラス敷が検出された。井戸周囲をバラスで舗装し縁に埴を並べていたものと推測される。遺物の状況から言って、この井戸は園池とほぼ同時期に機能し、廃絶したと考えられる。園池造営時には、以北の流路はすべて埋め立てられており、園池への水の供給源として近辺では唯一の存在であることから、園池との密接な関係が推測される。

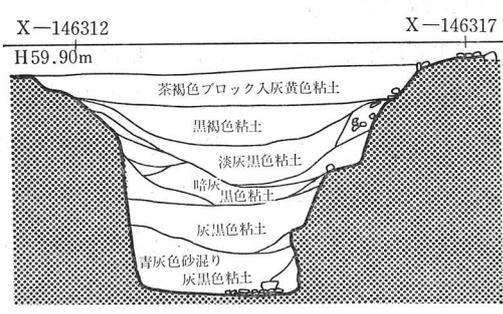


Fig.16 井戸 SE1547 断面図

SE1611 (PLAN 2)

SE1610 の北西。SB1570 の東で検出された素掘りの井戸。平面は一辺約 2 m の隅丸方形で、深さは約 0.5 m あり、埋土から平城宮Ⅱ~Ⅲ期の土器が出土している。これを廃絶の下限とし、周辺の遺構配置を見るに、東西塀 SA1500 以北の経営地域に比定された部分に他に井戸が少なく、SB1570・SB1571・SB1573 に伴うものと推定し得る。

SG1504 (PLAN 6)

池は流路 SD1525 廃絶後、SD1525 堆積土上層の暗灰色粘土の上に石張りを行って造成されている。基本的には SD1525 の岸を SG1504 の岸辺に利用しているが、それ以外の部分や、池底の調整、護岸石、州浜石敷の下や周辺の地形造成に茶褐色粘質土で整地が行われている。

* 池は蛇行した形状をなし、導水口から排水口まで延長 55 m、水面幅は中央部広い所で 7 m、規横導水・排水部の狭い所では 2 m の水面で、水深は溢流溝 SD1465 より標高 59.00 m の水位を想定すると、上流部で 20 cm、中流部から下流部にかけては 30 cm と比較的浅い。

全面石組で固めており、池底は径 20~50 cm の扁平な石を並べている。底石は上流部では意匠ほぼ平坦に、中流部では中凹み状に、下流部 6 m ほどは木樋排水路に向って一段低く石を一列据え、排水路としている。水際は底石に沿って径 20~30 cm の玉石を立てている。水位がこの立石の天端または少し下を満たす位置に据えられている。立石の外側は景石を据えつけない場所では、底石同様の扁平な玉石を緩勾配 (8°前後) で並べている。幅は広い所で 2 m (玉石 9 列)、狭い所では 30 cm (玉石 1 列)、一番外側は水面より 20 cm ほど高い標高 59.2 m 前後を示す。玉石敷の外側は拳大の礫敷で、幅 1~3 m の範囲に緩勾配 (10°前後) に敷き並べている。礫敷の外側は水面より 40 cm ほど高い標高 59.4 m の当時の生活面を示す。礫敷の外縁線間にはほぼ 10 m の幅となる。池底は石組墳 SX1524 のすぐ南、すなわち池の北端部と排水用木樋入口の天端で 20 cm の比高差となり、延長で除すと 1/280 の勾配となる。上流部では中央部の池底石全体を下げて、下流部では一段石を低くして排水用勾配をとっている。

池の形状は流路 SD1525 を踏襲した形で蛇行した曲線となり、その上を石敷、礫敷で意匠したものである。

石組は汀線沿いに、すなわち立石沿いに 5 箇所、玉石敷の外側線沿いに 5 箇所、礫敷の外縁沿いに 4 箇所みられる他、池中に 1 石であるが 3 箇所ある。汀の部分の石組は石を立てる形が多く、特に最初の西岸の突き出し部や中央東岸の石組は、池に向って氣勢を示す形に斜めに据えられている。汀線の外の石組は 2~3 石を組んでいずれも石を伏せる状況で据えつけている。岸辺の石組は地山にまたは茶褐色粘土の整地面に掘り込んで据えられており、池中の石は底石の上に根石などをかませて据えつけられている。

石組の景石に使用されている石は大部分が両雲母花崗岩質片麻岩で、一部三笠安山岩、チャート、石英斑岩を含む。底石・石敷・礫敷に使用されている岩石は奈良東部の山地、三笠山・春日山で産出する花崗岩、片麻岩、三笠安山岩、塩基性変成岩類の他、春日野礫層、奈良坂礫層の新时期礫層に分布する石英斑岩、チャート、ホルンフェルスなどである。

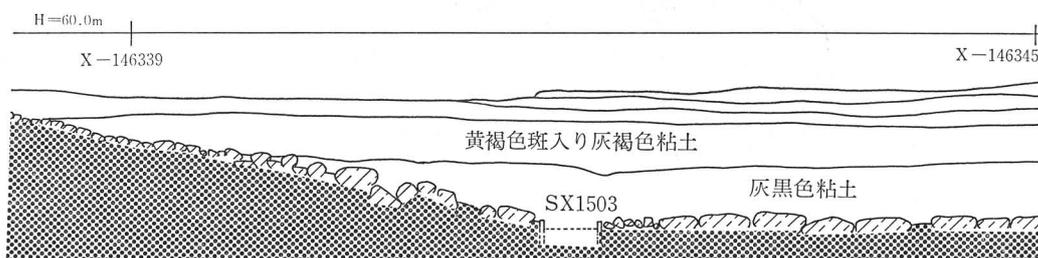


Fig. 17 園池 SG1504 堆積土層図

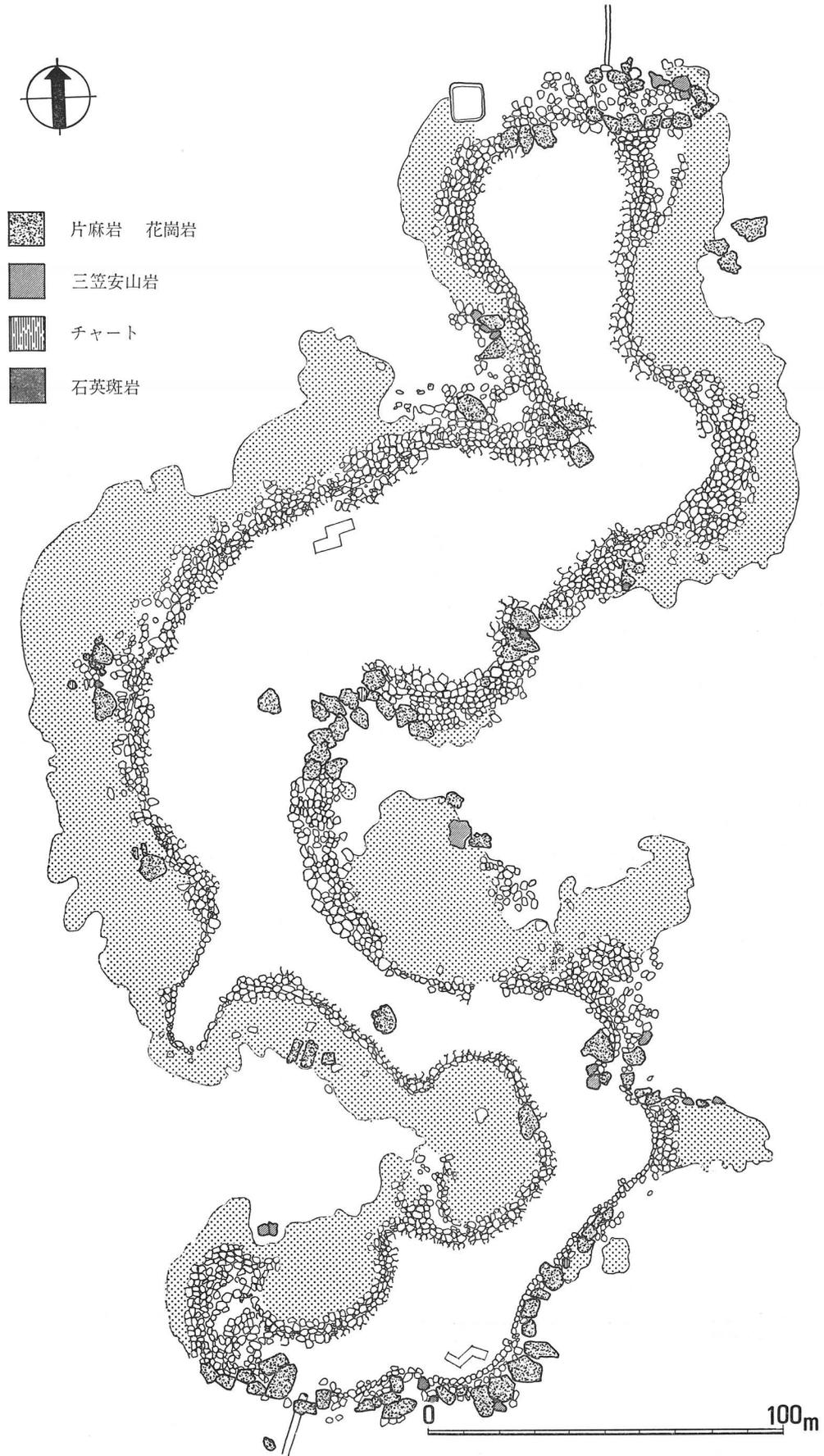


Fig. 18 園池 SG1504 景石・礫敷平面図

SX1463 (PLAN 6 ; PL. 11)

池尻南岸東寄りの汀沿いにある木枠である。SX1503 と異なり平面形が直にならずに斜めになっている。底板は6枚の

- * 板を組み合わせているが、形状が斜めになるため不等辺四角形や四角形に切り込みを入れたりした不整形な形状をしている。底板の厚さは 10~25 cm で各板の両端に 1~2 個の釘穴がある。側板は長
- * 片の4枚が 55 cm 前後、短辺が 38 cm 前後2枚と 25 cm 前後が2枚ある。側板の組み合わせはSX1503 と異なり、短辺2枚の両端の柄が出、長辺・短辺の各1枚の両端が欠き込みになっているが、

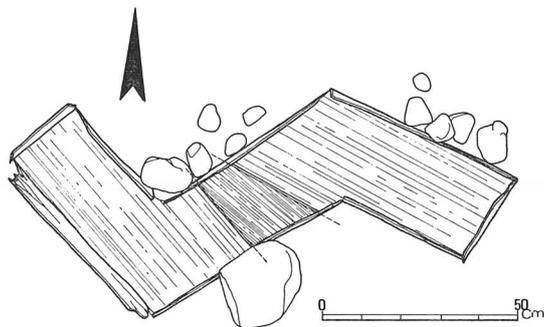
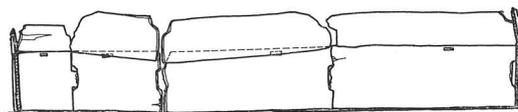


Fig. 19 木枠 SX1463 平面・断面図

- * それ以外の側板は片端は柄、片端が欠き込みとなり順に組み合わせる形となっている。釘穴は一部欠損している部分もあるが柄と柄受けの部分に側板相互をとめる形に打つ。側板の厚さは 20 cm 前後で高さは 16 cm ほどである。側板上部中央には穿孔があり、上の側板のとめに使用したものと考えられる。上の側板は薄く残存状況は悪いが、底板の高さは周辺の池底面より 6 cm 低く、水面より 30 cm ほど低いため、二段立ち上がって水面いっぱい位置である。
- * 木枠の材質は杉で木釘はムラサキシキブである。

SX1503 (PLAN 6 ; PL. 11)

池東岸の最初の屈曲部をすぎた位置で立石の汀線近く、池中にある木枠である。底板を6枚敷き、その上に側板を柄で直に組み合わせたものである。底板は長さ 81 cm、幅

- * 15 cm、前後厚さ 20 cm 前後の板を3枚ずつ組み合わせたもので、重ね合わせる部分(4~7 cm)は板を削り、底板が水平になるように細工している。底板の片端または両端ほぼ中央に短辺の側板をとめる釘穴が、外側の底板には長辺の側板をとめる釘穴が北側で2箇所、南側で3箇所ある。側板は長辺が 75 cm 前後と 42 cm 前後各2枚に柄を設け、短辺が 34 cm 前後の長さの板4枚に柄受けを作り組み
- * 合わせる形になっており、柄(4×5 cm)と柄受けの部分に側板相互のとめ釘穴がある。側板は厚さ 3 cm 前後で、高さは 15 cm 前後であり、側板の上面に長辺の2枚は2箇所、その他は中央に1箇所、長さ 4 cm、厚さ 1.5 cm、深さ 2.4 cm 前後の柄または栓孔の痕跡があり、上にもう一段側板があったものと考えられる。底

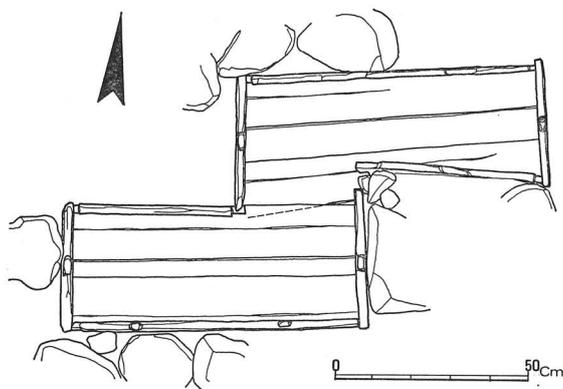


Fig. 20 木枠 SX1503 平面・断面図

板は厚さ 3 cm 前後で、高さは 15 cm 前後であり、側板の上面に長辺の2枚は2箇所、その他は中央に1箇所、長さ 4 cm、厚さ 1.5 cm、深さ 2.4 cm 前後の柄または栓孔の痕跡があり、上にもう一段側板があったものと考えられる。底

板は池底石より 15 cm ほど低く、水面より 35 cm 低いため 2 段立ち上っても水面より低くなる。木枠の材質は杉で、木釘はムラサキシキブである。

SX1523 (PLAN 6 ; PL.10)

池へ導水するための木樋で身部は延長 5.63 m、幅 20 cm、厚さ 13 cm ほどの一木をくりぬいてつくり、その上に蓋をのせて暗渠としたものである。暗渠の内法は幅 12 cm、深さ 10 cm 前後で、入口の木口端は 7 cm ほどほり残して貫通させない形で、従って水の導入は排水木樋 SX1464 同様に上面すなわち蓋に穴をあけて導水していたものと考えられる。蓋は残存状況が良くないが、幅 16 cm ほど厚さ 10 cm 前後である。木樋の上面木口に 3 箇所ほど柄穴の痕跡がみられるので、おそらく SX1464 同様太柄により組み合わせたものであろう。材種は檜である。木樋の出口は石組壙 SX1524 の中に注ぎ込むが、石組の中へ入る部分は開渠となっている。出口と入口の比高差は木樋の底で 4.6 cm ほどで勾配は約 1/160 である。木樋先端から内側に 25 cm の位置で木樋中心線より東西対称に 52 cm (2.5 m 間隔で 1 本ずつ 2 本の柱) 離れた位置

に、各 15×12 cm の角柱がある。木樋が暗渠であることや、上部から導水するため、木樋蓋導入口より上に管が伸び、その上に給水のための柵、または甕があってそれを支えるもののような、何等かの導水に関連する施設の痕跡と考えられるがその詳細は不明である。この木樋のための掘方は検出されないので、流路廃絶後の旧河川の肩を埋め立てた整地工事と同時に布設が行われたと推定できる。

SX1464 (PLAN 6 ; PL.10)

池尻から SD1466 の排水溝に水を流す木樋で、2 本をつないでいる。上流部の木樋は長さ 197 cm、幅 21 cm、厚さ 16 cm の一木をくりぬいたもので、木樋内法は幅 12 cm、深さ 7 cm、導入部の木口は上端から 3 cm の厚さで幅 11 cm にわたって切り込みがあり、埋

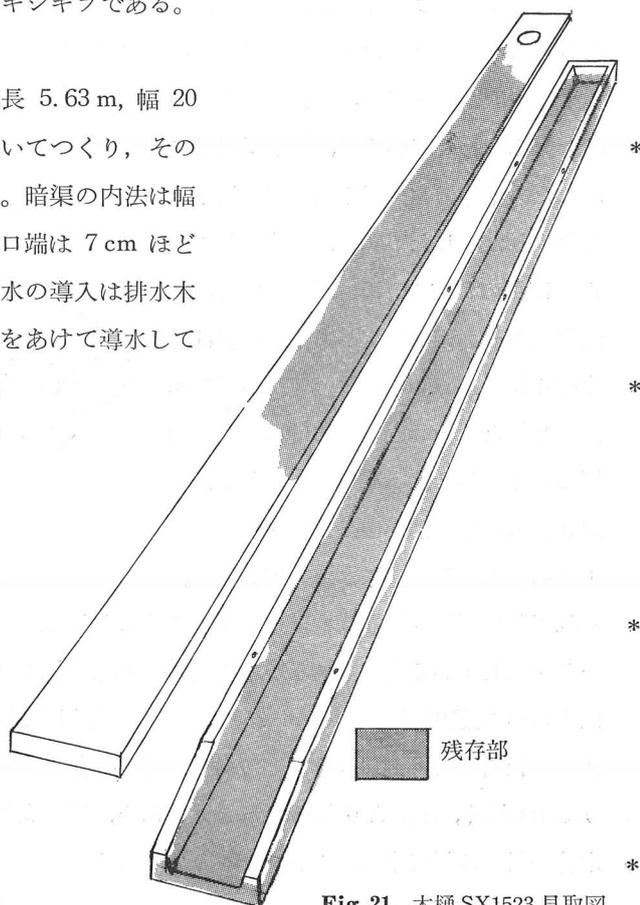


Fig. 21 木樋 SX1523 見取図

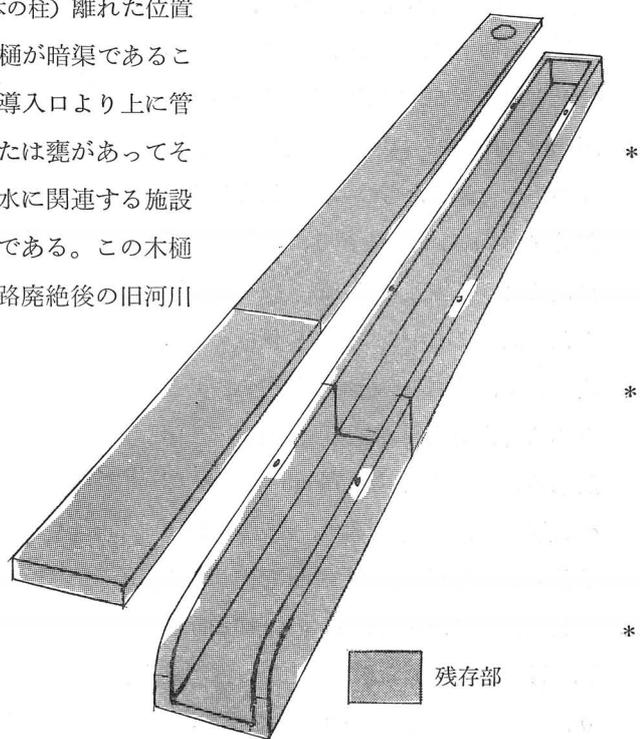


Fig. 22 木樋 SX1464 見取図

木がされている。木口から 52 cm の位置と 153 cm の位置の両側の天端に、長さ 4.5 cm、幅 2 cm、深さ 4 cm の蓋板と合わせる柄穴を掘っている。また排水側の木口は直に仕上げず、木口から 8 cm の範囲で円弧を描くよう上面を落としている。蓋は長さ 188 cm、幅 20 cm、厚さ 6 cm で、導入木口から 20 cm の位置に、排水のための長径 14 cm、短径 12 cm の楕円形の穴が開いている。蓋にも同位置に柄穴が開いており、木樋と太柄で組合わせる形で、蓋は先端より 8 cm の位置すなわち側板が弧を描きはじめる所までかかることになる。下流部の木樋は長さ 73 cm、幅 19 cm、厚さ 14 cm の一木をくりぬいたもので、木樋の内法は、幅 10 cm、深さ 10 cm、導入側の木口は直に上流部の木樋とつながるが、下流部は上流木樋同様、長さ 5 cm の範囲で弧を描くように上面を落としている。木口から 27.5 cm の位置に側板両側に上流部と

* 同寸法の柄穴がある。蓋は長さ 74 cm、幅 18 cm、厚さ 6 cm で木樋と合う太柄穴があり、太柄 (6.5 cm × 4.5 cm × 1.5 cm) が残存している。蓋板の先端は導入部の末端の弧の部分にかかる形に斜めに削られており、末端は弧の部分を含んで 7 cm の範囲に蓋板がかからず開渠となり排水溝 SD1466 に流れ込む。上流部の木樋と下流部の木樋は規模が異なるため、つなぎ部分の木樋の底と蓋の天端で 2 cm の段差ができる。排水木樋全体の勾配は 1/150 ほどである。木樋

* の材質は檜で蓋は杉が使われている。

SX1524 (PLAN 6 ; PL.12)

池の北端部にある石組塙で、導水木樋 SX1523 により導かれた水が流入する所である。東西 5 m、南北 1.5 m の長楕円状を呈し、周辺を一部欠損している箇所もあるが、径 50 cm 前後の花崗岩、片麻岩、三笠安山岩などの景石を立てている。立石は北、東、西は土留めの機能も果たしているが、南側にも立石が回り、水を滞水させる機能をもつものと考えられる。立石の内側は残存状況は良くないが、径 20 cm 前後の玉石が平坦に敷かれており、水を一旦滞水させ、南側の立石の間から上水を池へ導水する浄水的な機能を持っていたと考えられる。貯水の深さは導水木樋の流入口の高さや立石の高さを考えると 10 cm 前後の浅いものである。

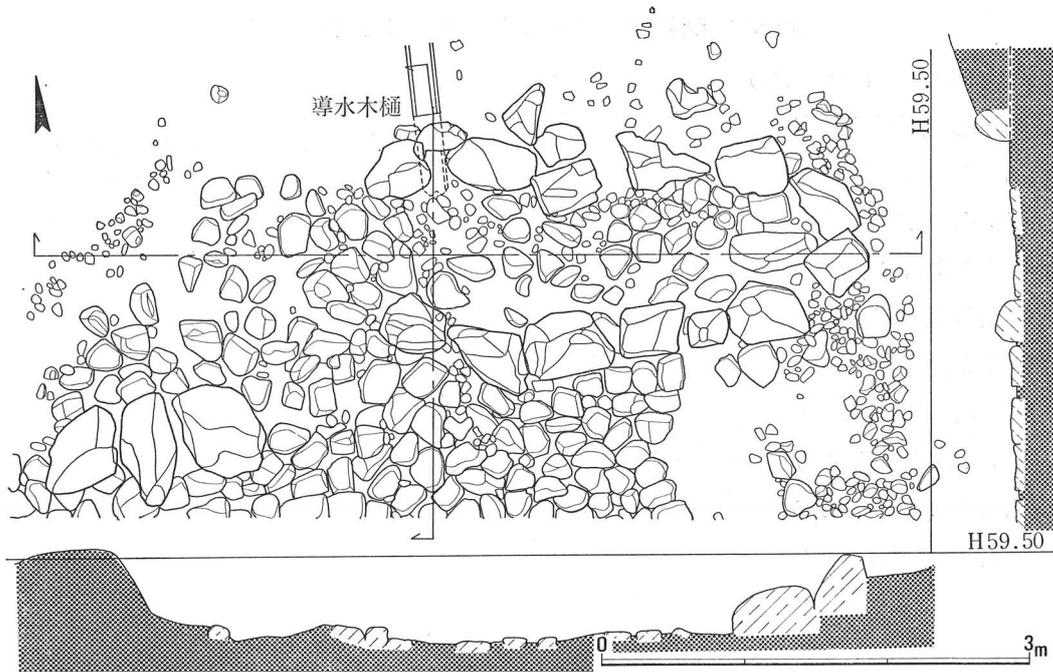


Fig. 23 SX1524 平面・断面図

SD1465 (PLAN 6)

池尻から排水溝 SD1466 に連なる溝で、残存状況が悪く明確でないが、残存する石敷の状況により SD1466 に向って段状に石敷を設け、石敷中央部が一段凹んで溢流する水が排水路 SD1466 に流入していたものと考えられる。

SD1466 (PLAN 6 ; PL.5)

溢流溝 SD1465 と排水木樋 SX1464 が流れ込む排水路で、東西幅 2.5 m, 南北は 8 m 以上、発掘区域外に延びる。両側に 20~30 cm の玉石一列を並べて土留とし、溝底は中凹み状となり、深さ 50 cm ほどである。底は石張りではなく粘土のままで、現在検出している範囲の勾配は約 1/80 である。北側は幅 5 m ほどの石張りを施し、木樋出口は土留のために 2~3 段石積をしている。

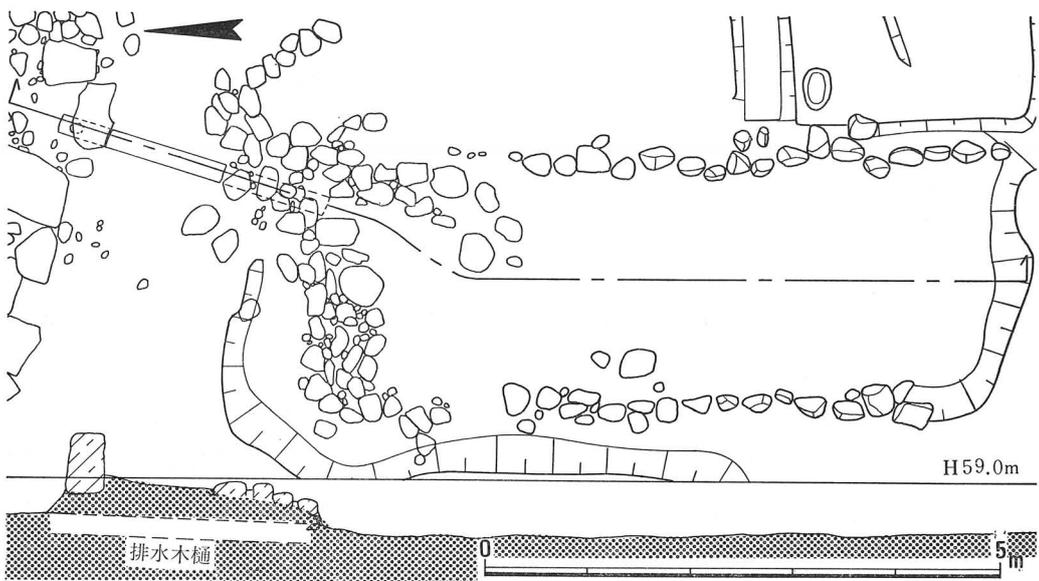


Fig. 24 溢流溝 SD1465・排水溝 SD1466 平面・断面図

SX1468 (PLAN 6 ; PL.13)

園池西岸中央より南で、水際の立石が岸に向って入り込む所にある幅 1.2 m, 奥行 3.5 m の長円状の入り込みである。径 20 cm の立石が縁石として一部抜けている所もあるが、四周に留石としてあり、岸に向って段々高く緩勾配 (2°38') に沿って据えられてい

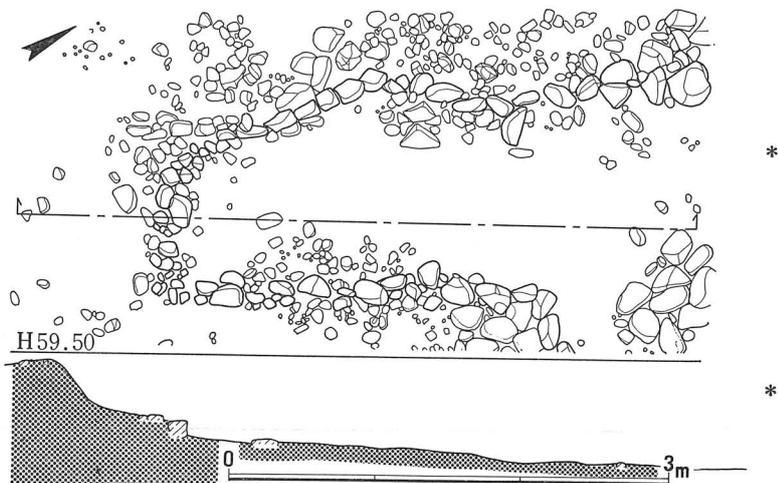


Fig. 25 SX1468 平面・断面図

る。内部は石敷が欠損したのか、もともと石敷がなかったのか定かでない。池水の水位より奥

行 2.5 m まで水が満ちることになり、舟入り状の施設とも考えられるが、水深 10 cm 程度と浅いため実用にはならない。

SX1461 (PLAN 6 ; PL.14)

園池東岸南寄りにある水

- * 際の立石より東の岸辺で、幅 2 m、奥行 3 m の長楕円状の張り出しである。立石に接して幅 60 cm ほどは 20 cm 内外の扁平な玉石が緩勾配 (8°45') に 3 列並びその外側に同様の勾配で礫が敷かれている。礫敷の北側には幅 30 cm ほどの石が 4 個縁石状に並ぶ。
- * 礫敷の留めのために全周に据えられていた可能性もある。機能的なものより意匠的な要素が強い。

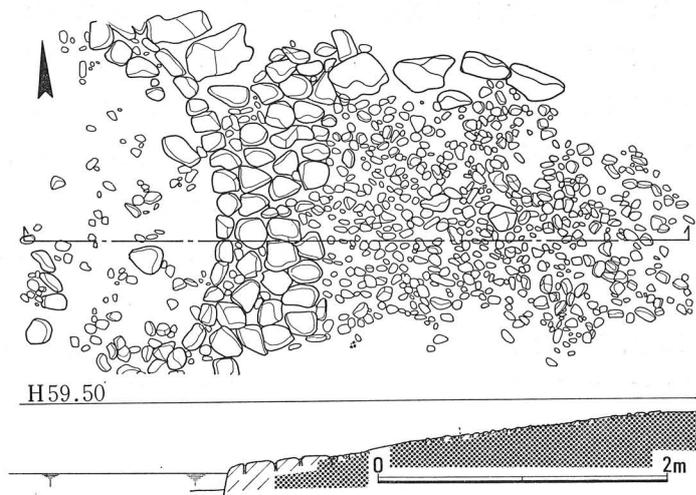


Fig. 26 SX1461 平面・断面図

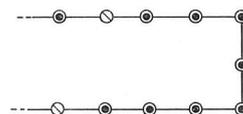
D D 期 (奈良時代後半) の遺構

SA1473 (PLAN 3 ; PL.5)

- * 発掘区南辺で検出した東西塀。東は園池の排水路 SD1466 の西、SB1470 の東側柱筋を南に延長した位置から始まり、西は発掘区の外へ続く。10間分、29.8 m を検出した。柱間は10尺等間である。東から10番目の柱抜き取り穴から、軒平瓦6663型式が出土している。SB1540・SB1470 と同時期の造営と推定され、SA1500・SA1455 と一連となり、園池を含んだ南北約 42 m (140尺) の区画を形成する。柱掘形は一辺 70~90 cm の略方形を呈し、径 30 cm 前後の柱痕跡あるいは柱抜き取り穴を伴う。

*** SB1574 (PLAN 2 ; PL.6)**

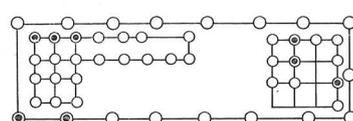
SB1570・SB1571 の南で検出した桁行 5 間以上 (4 間分 12.0 m, 10尺等間)、梁間 2 間 (6.0 m, 10尺等間) の東西棟掘立柱建物。方位はほぼ方眼に合う。柱掘形は一辺 1.0~1.2 m の略方形で、柱痕跡の径は 30~40 cm と大きく、これも一時期の中心的な殿舎となり



- * 得る遺構である。礎石建物 SB1540 の東側柱筋と、東妻柱妻を一致させており、同時期と推定される。桁行の規模を確定し得ないのが難であるが、SB1540 を主殿 (寝殿) とし、園池の位置する東を正面とすると、本遺構は寝殿に対して北の対屋たり得る位置にはあるが、そのように比定するにはなお問題も多い。

SB1552 (PLAN 2.4 ; PL.7)

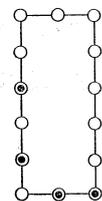
- * 発掘区北端で検出した桁行 7 間 (21.0 m, 10尺等間)、梁間 2 間 (6.0 m, 10尺等間) の東西棟掘立柱建物。建物内部は東に東西 3 間 (4.4 m)、南北 3 間 (4.4 m) 総柱。西には東西 2



間(2.7 m), 南北3間(4.4 m) 総柱の北方東側に東西5間(7.4 m), 南北1間(1.5 m) の細長いつ
 の状の張出しのつく遺構である。桁行の中央間の棟通り東側には長径 60 cm ほどの平坦な石
 を据え、西側にはそれを抜き取ったと思われる穴があって、東西各3間と中央間が区画されて
 いた可能性を示す。内部の遺構は、一部が床張りとなっていたと思われるが、あるいは棚状の
 施設である可能性もある。いずれにせよこのように長大で左右対称に近い平面は、内部施設と *
 あわせて特殊な性格の建物と推定される。中央間を吹き抜けの馬道と仮定すれば双倉に類する
 ものかとも思われるが、西方から張り出す内部施設があるので、なお性格は確定し難い(こ
 こでは倉に類する施設と推定しておく)。柱掘形は一辺 70~80 cm の方形を基本とするが、多くは
 抜き取り穴と重複していて原型を明確に留めない。内部施設の柱掘形は径 40 cm 前後の略円形
 を呈し、柱痕跡は径約 15 cm である。本体の柱抜き取り穴から平城宮Ⅳ期以降の土器が出土し *
 ており、下限をそのところに置き得る。また、内部施設の柱掘形からは奈良時代後半の土器が出
 土しているが、特に建物本体との時期差をもつものではない。

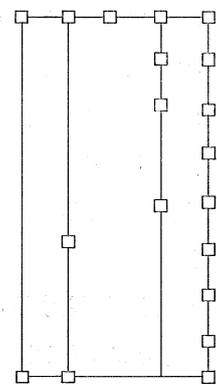
SB1470 (PLAN 6 ; PL.7)

園池南半の西岸近くで検出した桁行5間(12.0 m, 8尺等間), 梁間2間(4.8 m,
 8尺等間)の南北棟掘立柱建物。方位は北で方眼よりわずかに西へ振れる。北妻
 柱筋は、北西の礎石建物 SB1540 の復原南妻柱筋とほぼ合致し、また東側柱筋は
 南の東西塀 SA1473 の東端と一致することから、三者は同一の計画になったと推
 定される。すなわち SB1470 は主殿 SB1540 に対して、約40尺をへだたて南の汀
 近くに建てられた園池鑑賞、ないしは園池に関連した行事(宴遊など)のための建
 物と考えられる。園池はこの建物の正面で屈曲して汀が半島状に突き出す形となり、その上面 *
 のバラス敷は幅約 1 m の道路状となってこの建物の中央間付近にまで及ぶ。また、半島状の
 汀の北根元付近には舟入状の施設 SX1468 が位置しており、この建物の園池との密接な関連
 を示す。西方の SB1471 とは柱穴の重複があってより古いことを知り、SB1472 とも重複し、
 やはりより古いと推定される。柱掘形是一片 70~100 cm のほぼ方形を呈し、柱痕跡は径 15~
 20 cm ほどである。 *



SB1540 (PLAN 3 ; PL.6)

園池の西方、発掘区の西端で検出された桁行8間, 梁間2間, 東西
 両庇付, 南北棟礎石建物。桁行総長 24.0 m(10尺等間), 梁間総長 12.0
 m (10尺等間) の長大な規模を持つ。あるいは低い基壇上に建ってい
 た可能性もあるが基壇痕跡は残らない。削平されて遺存状況が悪く、
 かるうじて十数個所で礎石の根石ないしはその据付け穴、あるいは抜
 取り穴を検出し、柱位置を推定した。ある時期の園池を中心とした区
 画の主殿に比定される。園池北を東西に区画する塀 SA1500 と北妻柱
 筋をそろえ、塀が建物にとりつく形となっており、建物自体が園池周
 囲を区画する役割をも果している。したがって東の南北塀 SA1536
 との共存は疑問である。一方北方の建物 SB1574 の東妻柱筋と、本建物の東側柱筋は一致して
 おり、柱間寸法が同一であることから同じ時期の可能性が高い。また SB1542 と重複してお
 り、それより新しいことが知られる。



SK1516 (PLAN 3)

発掘区西南隅で検出した土壇。SA1473 の南に位置し、平面は径 1.5 m のほぼ円形を呈し、深さは 0.8 m。瓦片が多数出土した。奈良時代に属する廃棄壇と目されるが、時期区分は不明である。

* **SE1511 (PLAN 3)**

発掘区南端、中央やや西で検出した素掘りの井戸。南部は発掘区の外になる。平面はゆがんだ円形を呈し遺構面での東西方向の径は約 2.6 m、底ではややすぼまり約 2 m である。深さは約 1.7 m で、埋土は 6 層に分かれ、最下層から、面戸瓦片、土器片などが出土している。奈良時代に属し、この地区の性格上 SA1473 造営後のものと推測される。

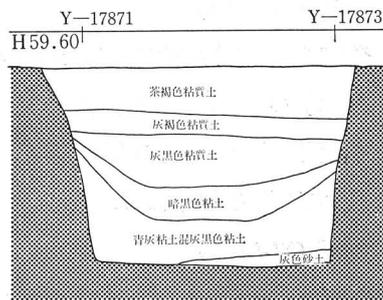


Fig. 27 井戸 SE1511 断面図

SD1479 (PLAN 5)

SD1477 の西に並行する南北溝。SB1476 の西南隅の柱掘形と重複しており、より古いことを知る。検出長約 1.5 m、幅約 30 cm、深さ約 5 cm で南は発掘区の外に延びる。時期は園池と同時の可能性はあるが、性格は不明である。

SD1486・SD1487 (PLAN 5)

発掘区東端、SB1476 の北方で検出した L 字形の溝。西半は東西溝 SD1486、東半は南北溝 SD1487 で、北端は発掘区の外に延びる。SD1501・SD1499 と重複し、それらより新しい。SB1476 の北約 5 m の地点でほぼ直角に西に折れて SA1483 付近にまで及ぶ。南北部分約 4.5 m、東西部分約 7 m を検出し、幅 20~30 cm、深さ 5~10 cm である。埋土には顕著な遺物を含まない。性格は不明であるが、発掘区外園池東方の何らかの地割りに関連するものと推定される。

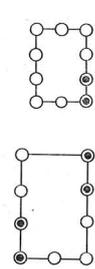
E E 期 (奈良代時末~平安時代初頭) の遺構

* **SA1483 (PLAN 5)**

SA1455 に重複する南北塀。4 間分 (8.4 m) を検出したがさらに南へ延びる可能性がある。柱間は 7 尺等間と推定されるが、北から 2 間目はややせまく、ばらつきがある。4 間で終るとすれば、SB1476 に伴う目隠し塀に比定し得るが、なお断定し得ない。柱掘形は径 40 cm ほどの不整形で柱痕跡も径 10~15 cm と小さい。SA1455 の柱掘形とわずかに重複がみられ、より新しいことを知る。

SB1471 (PLAN 3; PL. 7)

SB1470 の西に接する位置にある。桁行 3 間 (4.8 m, 16/3 尺等間)、梁間 2 間 (3.6 m, 6 尺等間) の南北棟掘立柱建物。SB1470 より新しく、位置からも園池終末期の建物と推定される。方位は北で方眼よりわずかに西に振れる。柱掘形は一辺約 40 cm の略方形と小さく、柱痕跡は径約 20 cm である。



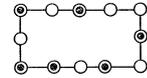
SB1472 (PLAN 3; PL. 7)

SB1470 の西南に接する位置にある桁行 3 間 (6.7 m, 7.5 尺等間)、梁間 2 間 (4.4

m, 7.5尺等間)の南北棟掘立柱建物。SB1470 と重複し、また SA1473 とも約 1 m の間隔しかなく、共存の可能性は低い。柱掘形から平安時代の遺物が出土しており、SB1471 同様、園池終末期の建築と推定される。SB1471 とは西側柱筋をほぼそろえるが、共存関係は不明である。柱掘形は一辺 50~70 cm の略方形、柱痕跡は径約 20 cm である。

SB1985 (PLAN 4)

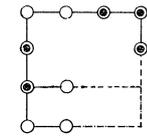
発掘区の東北隅で検出された桁行 4 間(7.8 m, 6.5尺等間)、梁間 2 間(3.6 m, 6尺等間)の東西棟掘立柱建物。方位は北でやや東に振れる。SB1552 より新しく、築地南落溝である SD1545 にも近接しすぎるくらいがあり、平安時代に属する遺構と推定された。



*

SB1476 (PLAN 5)

園池の東方を画する塀 SA1483 よりさらに東に位置する。桁行 3 間(7.3 m, 8尺等間)、梁間 2 間(4.8 m, 8尺等間)、南片庇付(庇の出 2.4 m, 8尺)の東西棟掘立柱建物。方位は北北東にやや振れており、東南部分は発掘区の外になる。約 20 尺をへだてて西に眼隠し状の南北塀 SA1483 を伴なうと推定されるが、SA1483 は SA1455 と重複しておりかつ新しく、また、本建物の柱痕跡から平城宮 III~V の時期の土器が出土していることから、SA1455 以降ないしはさらに園池終末期に位置付けられる。柱掘形は一辺 40~60 cm の略方形、柱痕跡は径 15~20 cm である。



*

SD1475 (PLAN 5)

発掘区東端、SB1476 の東 3.5 m で検出した南北溝。幅約 3 m の東西拡張区の南北にわたって検出され、南北とも発掘区外へ延びる。幅約 60~80 cm、深さ約 10 cm。埋土には遺物を含まない。SD1480 よりも新しく、SB1476 に関連する可能性を持つ。

*

F 京廃絶後およびその他の遺構

SD1452 (PLAN 5)

発掘区東南隅、東端で検出された南北溝。SD1453 に流れこむ溝と推定される。遺物は出土しない。検出長さ約 1.5 m、幅約 30 cm、深さ 5 cm である。

*

SD1454 (PLAN 5)

SD1453 に連なる南北溝の一部。約 1.1 m の長さを検出したに留まる。幅約 30 cm、深さ 5 cm である。その位置から SA1455 に関連するものかとも考えられるが定かでない。

SX1460 (PLAN 6)

発掘区南端、園池排水溝 SD1466 の東岸で検出した柱掘形。南北約 60 cm、東西約 40 cm の長円形を呈し、径 25 cm の柱痕跡及び柱根の一部を留める。発掘区内では独立しており、関連する柱穴類が求められず、性格は不明である。

*

SK1474 (PLAN 5)

発掘区東の拡張区の東端で検出した土壇。東西を長径とし 2.0 m、短径 1.4 m の長円形を呈する。遺物は少なく、時期・性格ともに不明である。

*

SK1481 (PLAN 5)

発掘区東部張り出し部分、SB1476 北西で検出された土壇。平面は東西 2.0 m、南北 1.8 m の

不整形で、深さ約 45 cm、すりばち状にくぼむ。遺物少なく、時期・性格共に不明である。

SK1506 (PLAN 6)

SB1505 に重複する土壌群。SB1505 の内部から西側柱筋にかけて 9 個の土壌が集中して検出され、そのうちいくつかは、相互に重複するが、いずれも建物の柱掘形より新しく、建物と

- * 直接関係のない後世のものである。

SX1513 (PLAN 3)

発掘区西南隅、SB1510 の西方に散在する土壌群。形は不整形で一定しない。いずれも近世以降のものである。

SK1534 (PLAN 6)

- * SA1500 の南、SB1505 と SA1536 の中間で検出された土壌。西部が土層観察用の畔の下となつて平面の全形は明らかでないが、おおむね一辺 1.8 m の略方形である。深さは約 15 cm である。遺物の出土は少ない。SD1532 の西南端で重複し、それより新しい。

SD1555 (PLAN 4)

- * 発掘区中央北端、SB1552 の西方の柱筋に重複する南北溝。部分的に削平を受けており浅く、幅 25~40 cm、長さ約 6.5 m にわたって検出した。SB1552 より古い時期の溝であるが、遺物の出土はなく性格は不明である。

SD1477 (PLAN 5)

- * SB1476 の西南で検出された南北溝。埋土に遺物を含まず、時期及び性格は推定し難いが、園池造営以前の一連の東西溝よりも新しい。幅は約 30 cm、長さ 2 m にわたって検出し、深さは約 5 m で南は発掘区の外に延びる。

SD1531 (PLAN 4)

SB1573 東の東西溝。西端は SD1532 と重複し、より新しい。検出長さ約 3 m、幅約 40 cm、深さ約 20 cm である。遺物の出土は少ない。

SD1548 (PLAN 4)

- * 発掘区中央北方、旧流路 SD1525 の屈曲点と SE1547 の間に位置する東西溝。幅 1.0~1.2 m、深さ 20~30 cm で、西方はさらに延びて、井戸 SE1547 の西の溝に連なるものと推定される。

SA1554 (PLAN 4)

- * 発掘区北端に近く、SB1552 の内に収まるように重複する東西塀。SB1552 とは無関係の遺構と推定される。

SX1558 (PLAN 4)

- * 発掘区北端、SB1552 の東半北方で東西に検出した 2 個の柱掘形。掘形はいずれも径 50 cm ほどの不整形円形を呈し、内に径約 15 cm の柱痕跡を留める。柱間は 4.3 m、築地南側溝比定の SD1545 との距離は約 1.2 m である。柱痕跡を持つ掘形でありながら他にこれと対になるものが見出されないことや、その位置から、坪の北西に開く門となる可能性があり得よう。宮内外ではこれに類する遺構の発見例がある。ただし前後の控柱の柱掘形は発見されないの、棟門か屋根のない冠木門が想定されよう。また、門に連なる築地あるいは塀に類する遺構は見出されていない。